

自然の園

大森 海太

春、花の季節が終ると、次は新緑のシーズン。

木々の枝先には若葉がひろがって輝きを増す。去年の暮、黄色い葉が散って裸になった近所の寺の銀杏も、いつのまにか新しい緑でひとまわり大きくなっている。

家々の垣根や公園の草むらなどでは、ツツジやそのほか名も知らぬ草や木があちらこちらに新芽を出して、各々の領分を主張しあっている。この明るくてちよつと雑然とした雰囲気は、なにやら好ましいものだ。

かつて昭和天皇は「雑草などという名の草はない」と言われてまわりを窘められたと聞く。私は植物の名前に疎いので故天皇のご意向には添えないが、それでもいろんな草木が混じりあい、競い合っている様子は、眺めているだけで楽しくなる。

ところが世の中には、この自然の草木に人の手を入れて造園の美を求める連中が多い。ベルサイユ宮殿の庭園をはじめ、日本でも京都の著名な寺の庭、そのほか一般の家の庭木も、それぞれ庭師たちの苦心の作なのだろう。

でもこれは私の好みじゃない。自然の樹形をわざわざ刈り込んで丸くした庭木や、きつちりと角刈りにした垣根など、植木屋にとっては自慢の一品かも知れないが、私に言わせればプロの自己満足だ。なかには木立ちで文字の形を模したり迷路を作ったり、小賢しいといしか言いようがない。

それよりもあまり手入れをしていない、自然の園とでもいうような、なかば伸び放題の庭はどうだろうか。片隅にはこわれかけたベンチがあつて、天気の良い日の昼下りなど、そこに座つて本を読んだりしているうちにいつの間にやら眠ってしまつて、気がついたらよだれをたらしていた……。

そんなところってないかなあと、暇にまかせて空想を廻らせる。

話は変わるが、今日もカミサンのお供で近所のスーパーに買い物に行つた時のこと。途中のマンシヨンの生垣では、今まさに職人たちが入って電動ノコの音もやかましく、せつかくの新芽をまっ平らに刈りこんでいる。

フン、気に喰わん。このばちあたりども。